## 書　評

『探偵小説の街・神戸』野村恒彦著（エレガントライフ、2013 年）

# 神戸の街と愛する探偵小説

余　玟　欣
Wenhsin YU

鎖国政策下の江戸時代には、神戸港は国内交通・物流の要衝として、重要な役割を果たした。開港後にも、国内外の人・物・情報が往来する拠点として、また、国際貿易港として常に先端の設備を整備し、世界を代表する港に発展した。日本で最初に開港したのは横浜港だが、神戸港は明治期に横浜港を破って日本一の座にあった。

探偵小説は近代化と都市化の産物である。たとえば、日本の探偵小説と同時期に発生した近代中国における創作探偵小説も上海という「魔都」で誕生したのだ（しかし、わずか数十年において、中国の探偵小説は繁栄を経験した後、日本の探偵小説とは正反対に、衰退の一途をたどった）。そして、明治期に神戸港は国際貿易港として発展しただけではなく、その後背地である神戸市街地も明治時代に外国人居留地として整備され、異国的な情緒を持つ場所になった。ゆえに、神戸という街は当時の生活様式と社会状況が示したように、港町の開放的な気質、異国や魔都の雰囲気、異人と洋館などの特質を備え、探偵小説の発生にとっての好立地であったと考えられる。また、神戸は文化交流の拠点であるため、外国からの作品輸入や古本屋で古本を取得することが他の都市より容易である。それによって、神戸では探偵小説読者の創出（たとえば外国の探偵小説誌を定期的に購読、古本屋で探偵小説を漁るなど）、そしてこれらの読者の探偵小説作者への転向（地方探偵小説誌の発行、投稿、翻訳など）を大いに促した。さらに、開港の影響によって、商売や移住などの理由で人口が移動した。人口の流入によって、都市によそ者が集中し、社会組織から抜け出る人も増え、犯罪や社会問題も増加した。こうした神戸は、探偵小説の要素であるモダニズムがあり、近代的な科学や合理主義も育てた。そして、合理主義と科学の発達によって、自然の中の未知なものが少なくなって、非合理な恐怖に読者は興味を示さなくなったが、その後人々は科学という新たな恐怖を知って、それがさらなる恐怖と不安を生み出すことになった。こうした複数の要因が重なることで、神戸は探偵小説が育つ理想的な土壌になったのである。

本書は八章構成である。大別すると三つの部分に区別できる。

まず、第一章から第三章までは、神戸と日本の創作探偵小説の発展との関係を時系列的に検討している。第一章「探偵小説の揺籃期と神戸」で、神戸探偵小説クラブの成立によって、神戸が探偵小説史の表舞台に出たことについて述べている。探偵小説の発展初期、大阪で「探偵趣味の会」設立に向けた同好を集めるため、江戸川乱歩（1894-1965）

が神戸に横溝正史（1902-1981）と西田政治（1893-1984）を訪問した経緯が書かれている。その例会の開催によって、西田政治の自宅で、江戸川乱歩、横溝正史、西田政治の三人がそろったことは、神戸における探偵小説の発展史上の画期的な出来事である。そして、神戸市立図書館での講演会（探偵小説愛好家の雄、馬場孤蝶（1869-1940）の講演）、神戸探偵小説クラブの例会での『新青年』などの探偵小説専門誌に関する内容と国内探偵小説についての最新情報の紹介と宣伝があるため、神戸と探偵小説の関係が強くなっていく。しかし、神戸に代表する探偵小説家である横溝正史が、江戸川乱歩からの誘いを受けて神戸を離れることによって、乱歩が書いた探偵小説史である『探偵小説四十年』での神戸に関する記述は少なくなった。そこで、一時期に日本の探偵小説活動を率いた「神戸」もその歴史からさっと姿を消してしまった。第二章「『新青年』の時代」では、『新青年』と繋がる代表的な神戸作家たちとその作品が紹介されている。例えば、横溝正史の初期の短編には、神戸を背景にした作品が多数存在する。徳島生まれ神戸育ちの日本 SF の父である海野十三（1897-1949）が短編「電気風呂の怪死事件」を『新青年』に発表してデビューした当時、『新青年』の編集長は横溝正史であった。神戸出身の探偵作家山本禾太郎（1903-1951）の最大の業績は、神戸新聞と京都日々新聞に連載された『小笛事件』である。西田政治の創作は少ないが、『新青年』において多くの翻訳文章が発表した。そして、戦後になって関西探偵作家クラブ会長、日本探偵作家クラブ関西支部長に就任した。このように、多くの情報が述べられている。第三章「『ぷるふいる』の時代」で、関西発の探偵小説誌『ぷろふいる』を通して、神戸における多くの探偵小説家の活躍により、「神戸」が再び探偵小説史のなかで現れたことを明らかにしている。さらに、第一部のこの三つの章を通して、探偵小説史のなかの神戸を読み解くことにおいて、神戸という「場」で探偵小説の愛好が引き続いて伝承されることを明らかにしている。特に、『ぷろふいる』の再考察を通じて、同誌は地方誌であるもの、その重要性は日本近代探偵小説史を代表する雑誌『新青年』に劣らないものであったことを証明している。

次に、第四章から第六章までは、神戸と探偵小説誌『ぷろふいる』、探偵小説家たち、関西探偵作家クラブ、神戸探偵小説愛好会との関係についての個別考察である。そこで、神戸における探偵小説と人の関係を中心に論述を展開している。第四章「『ぷろふいる』と神戸の作家たち」で、前述した西田政治、山本禾太郎以外に、神戸探偵倶楽部の代表的なメンバーである酒井嘉七（1903-1946）、『ぷろふいる』二代目編集長である九鬼澹（1910-1997）、神戸ゆかりの代表探偵作家である戸田巽（1906-1992）について詳細に紹介している。第五章「関西探偵作家クラブ」で、関西探偵作家クラブ成立の経緯、例会の記録を踏まえて、所属した作家たちの著書の再評価を行っている。第六章「神戸探偵小説愛好会」では、著者の野村氏と深く関係している神戸探偵小説愛好会の横溝正史にかかわる活動について詳述されている。特に、横溝正史の生誕地碑の建立について、構想から完成までの経緯が書かれている。そして、毎年の 11 月に建立イベントを行い、横溝正史の探偵小説に関連した講演会を実施している。ちなみに、2018 年 11 月の第 14 回の記念イベントは、探偵小説研究家の日下三蔵氏による講演であり、テーマは 「『横溝正史ミステリ短篇コレクション』（柏書房刊）を編集して」であった。

第七章「神戸とミステリー（その一）」と第八章「神戸とミステリー（その二）」で、神戸を背景にした探偵小説の紹介と分析、またはフィールドワークの記録がある。ここ

では、単なる街巡りでなく作家の活動や作品を時系列に述べて、それに纏わるゆかりの土地情報を織り込んでいく内容が充実している。例えば、六甲山がミステリーの舞台となった多島斗志之（1948-）の『黒百合』、神戸の華僑と関係している陳舜臣（1924-2015）の『炎に絵を』、戦前における神戸最大の盛り場である湊川公園を背景にした橋本五郎（1903-1948）の『疑問の三』など作品が紹介されている。

以上が、本書の概要である。

本書の中で特に身近に感じたのは、野村氏が市バスの二番系統で酒井嘉七のゆかりの地を訪ねることである。それは、評者もよく二番系統を利用し、その付近に散歩しに行ったからである。また、野村氏と横溝正史、西田政治との交流についての描写である。野村氏の筆によって、今まで本の中でしか会えない作家たちの生き生きした姿を見ることができるうえ、野村氏の探偵小説に対する熱意を感じる。そして、とりわけ興味深く読んだのは、探偵小説雑誌『ぷろふいる』に関する論考である。神戸市立図書館では、『ぷろふいる』全巻の復刻版を所蔵している。『ぷろふいる』は、昭和 8 年 5 月に創刊号が世に出て以来、昭和 12 年 4 月に至るまで、全 48 冊を発行し、戦前に代表的な探偵趣味専門の雑誌である。最終号で『ぷろふいる』は新誌名「探偵倶楽部」と改めると予告したが、この新雑誌は結局刊行されなかった。『ぷろふいる』には、探偵小説の時論、外国探偵小説の翻訳、探偵小説の連載などのコラムが設置されていた。例えば、西田政治の「雑草庭園」（途中から「毒草園」に変更）というコラムで国内外の探偵小説の状況や当時の文壇に関する時評が連載されていた。『ぷろふいる』は内容が充実した優秀な探偵小説専門誌であったことがよく理解できる。『ぷろふいる』で、特に重要と思われるのは「ぷろふいる談話室」という、主に読者の投稿を募集し、掲載していたコラムである。つまり、『ぷろふいる』の読者は単なる探偵小説についての新しい知識を「受けて」ではなく、「積極的読み手」として、評論、創作などの活動をしていたのである。こうした『ぷろふいる』は、当時の広告が宣伝するように、「ぷろふいるは新作家の登龍門」というスローガンに相応しい雑誌であると考えられる。この点について野村氏は、中島河太郎の言葉を引用し、「「それが既成作家に刺激を与えたには違いないが、（『新青年』誌全体として）探偵小説そのものへの新鮮な意欲を持たなかったこと」により、『ぷろふいる』が探偵小説文壇の中心的存在になったのである」（頁 42-43）と述べている。今まで日本の創作探偵小説を論考する際には、主に『新青年』を中心に行われていた。しかしながら、日本創作探偵小説の歴史には、『ぷろふいる』の重要性は無視できないものであったことを、本書は論証している。

評者は最初神戸にたどり着いた年に、横溝正史の生誕地碑を訪問することがあった。当時の横溝正史の『自伝的随筆集』の内容にしたがって、手書きの地図で西田政治の自宅、神戸二高など、神戸歩きをしてきた。野村氏の研究によって、横溝正史の作品群は大きく三つの時期に区別できる。初期におけるユーモアのある短編、中期の草双紙趣味、戦後期の本格探偵小説である。評者は本書で紹介された横溝正史の諸作品のなかで、特に戦後期の本格探偵小説の一つの代表作であり、戦後混乱期の日本社会を描写した、神戸と深く関係する『悪魔が来りて笛を吹く』を愛読している。大学時代にこの本を読んだ後に、胸に残った衝撃を今でも忘れていない。周知の通り、戦前に大変流行っていた探偵小説は、戦中期に入ってから完全に停滞している状態になった。そのために、本書

だけではなく、大部分の探偵小説についての論集は、戦前と戦後の探偵小説家と作品については多くを述べてきたが、戦中期のことにはあまり触れていない。しかし、横溝正史は『自伝的随筆集』で「日本が一番困難で絶望的な時代に、おまえはどこでなにをしていたのか」と自問自答した際に、「無我夢中でいわゆる本格探偵小説なるものを書いていたのだ」（頁 14-15）と回想している。この点から考えると、この戦中の空白期があるからこそ、戦後の日本創作探偵小説も、すぐ戦前のような盛況へと蘇るのではないかと、評者は考えている。

最後は一点だけ、疑問点というか、提案を述べておきたいが、神戸は探偵小説が発展する好立地ということは理解できるが、なぜ横浜港、長崎港など、神戸港と同じような地位を占める国際港で探偵小説がそこまで発展していないのか。これに対して、神戸とこれらの港町とのあいだには、ある決定的な違いがあると考えられる。それが何なのかわかれば、より一層面白く読めるのではないかと思っている。